樋口芳麻呂氏蔵葉室頼業筆本『和歌一字抄』翻刻

日比野　浩　信

藤原清輔『和歌一字抄』の現存伝本は、歌の出入りによって原撰本、中間本、増補本と三系統に分類できるようであるが、各系統においても歌の出入りの他、歌順や作者名にも違いがあり、歌句の異同も多く、更に細かなグループに分けられそうである。特に増補本系統は、他二系統に比べて伝本も多く、校合による挿入や書き入れも少なくはなく、より複雑な様相を呈している。他本からの明らかな転写の認められない限りは、一本でも多くの本文が公にされ、本文研究の対象として供されるべきであると考える所以である。

ここに翻刻する樋口芳麻呂先生蔵『和歌一字抄』は、既に井上宗雄氏が調査をなされ、新編国歌大観解題にも触れられているものである。管見に入った伝本の中では、特に志香須賀文庫蔵日野資時本と近しい関係にあるようであるが、これについては別稿に譲ることとする。

縦二十四・七ｾﾝﾁ×横十八・〇ｾﾝﾁの袋綴一冊本。紺色の表紙を施し、左肩に「一字抄　上下」と記した題簽がある。内題は「和歌一字抄上（下）」とする。一面十一行、和歌は一行書とする。遊紙無し、墨付き百十丁。二丁表から本文を記すが、一丁裏に「此抄者清輔朝臣所撰也。近衛院御宇仁平年中抄歟。猶勘也。」とあり、同一の文言が三康図書館蔵本、伝後光厳院筆本にも存している。「冷泉府書」「頼業（角印）」等、四つの蔵本印があり、末尾に「寛文九年十月書之　頼業（印）」

の奥書がある。「思文閣古書資料目録　第百四十五号」に、葉室頼業ら筆の八代集が掲載され、寛文九年の頼業の花押の記された奥書部分が写真で掲出されているが、字形も酷似しており、まさに同年の奥書を持つ樋口本『和歌一字抄』も葉室頼業筆本と断定してよさそうである。古写本の多くはない『和歌一字抄』では、江戸前期の書写本として注意すべきであろう。

樋口本の歌数は、次の通りである。

	本　文	書き入れ	計（首）
上　巻	五八二	二五	六〇七
下　巻	五七三	二	五七五
計	一一五五	二十七	一一八二

但し、

遠尋花 後　　小弁 祐子内親王女房

山桜心のまゝにたつねきてかへさそ道ほとはしらるゝ（一一七）

と

遠尋山桜　　関白前太政大臣

帰へきほとをおもはぬ道ならはのとかに峯の花はみてまし（一一八）

の間に、

遠尋山花　　新院御製

尋つる花のあたりになりにけり匂ふにしるし春の山風

を、一旦は書き入れながらも、紙を削って消去している。この歌は、「遠」の項の最後、すなわち、

遠岸蘆花　　信綱朝臣

見渡せはをちの河きし白妙に浪たちまよふあしのほすゑに（一一二六）

の次（一一二七）にあり、後の本文にあることに気付いての削除であろうが、ここにこの歌を記していた伝本が存していた、その名残とうかがわれるのである。管見の範囲では、増補本においてはこの歌は「遠」の項目の一番最後に収載される。原撰本では京都女子大学谷山文庫蔵本、書陵部蔵本、三康図書館蔵本（以上、Ⅰ類）は、樋口本の一一七番歌の次に存するが、内閣文庫蔵本（Ⅱ類）にはない。替わりに一一八番歌が内閣文庫本にはあるが、他三本にはない。歌の入るべき位置としては「遠尋花」題の一一七番歌が諸本同位置であるので、これを基準とすると、「尋つる…」の歌は、樋口本の削除された書き入れや、原撰本のⅠ類本などのような位置に存するのが合理的であり、増補本のように「遠岸蘆花」題の歌の後に入るべきではなかろう。この「尋ねつる…」歌の位置が、原撰本と増補本との分類基準の一つとすることが可能であるならば、樋口本の書き入れは原撰本系統との接触の可能性をも考慮に入れる必要があろう。他の増補本系統には見られないが、原撰本Ⅰ類本に見られる歌が書き入れられている場合もある。Ⅱ類本本文への、Ⅰ類本との校合が踏襲されたものが、樋口本の書き入れとしてその姿を留めているという見方ができるかもしれない。

原撰本の現存状況や、増補本の形態という点では、目次の在り方などからも、その関連をうかがわせるように思われる。原撰本では全て上巻に上巻分の目次のみが付されており、明らかに上・下巻が分立していたことを示しているが、増補本中、例えば丹鶴叢書本などでは、本文を上・下巻と区分しているにもかかわらず、上・下巻分の目次を巻頭にまとめて付すといった形式となっている。これは、上・下二分冊→上・下合綴一冊→目次一括一冊という伝播をたどっていることは想像に難くない。歌の出入りや語句の異同による増補本のグループ分けが最も有効であることは当然であるが、他本との接触・校合などが複雑である。目次の形式をも加味し、伝播の過程や、異系統間の関連をも考慮することは、全く無意味

であるとは言えないであろう。

樋口本、特にその書き入れは、このような点からも興味深い資料を提示しているといえるのではなかろうか。

何分にも管見に入った伝本が少ないため、ここでは簡略に触れるに留め、更に多くの伝本を調査して上で、改めて私見を述べることとしたい。

注

(1) 原撰本『和歌一字抄』は、村上さやか氏「校本　原撰本『和歌一字抄』」(甲南女子大学大学院　論叢　第十六号～第十八号(未完)」及び、中村康夫氏「藤原清輔編『和歌一字抄』原撰本系統校本作成の試み」(国文学研究資料館紀要　第二〇号)を参照させていただいた。原撰本の分類は、村上氏論文に従った。

(2) 東京古典会入札会の目録(昭和六十一年)に写真版が掲出されている。

凡　例

樋口芳麻呂先生所蔵葉室頼業筆『和歌一字抄』を、できる限り底本に忠実に翻刻するよう努めたが、翻刻するに当たり、次の要領で行った。

一、漢字・仮名の別、仮名遣いは、全て底本のままとした。

一、変体仮名は通行の字体に改め、漢字の異体字は概ね通行の字体に改めた。

一、底本の改丁は、」で示し、丁数・表裏は(一オ)(二ウ)のように示した。

一、便宜上、本文の和歌には通し番号を付した。底本の特色の一つである行間頭等の書き入れは、[　]で囲って区別し、別に番号を付した。

一、削除された書き入れ歌一首は、一応翻刻しておき、㊀として数には含まない。

なお、中村康夫氏には『和歌一字抄』諸伝本の歌の出入りに関する資料をお与えいただき、ご教示を得た。衷心感謝申し上げる。また、本稿脱稿後、村上氏「原撰本『和歌一字抄』上巻の基礎的考察」(和歌文学研究　第七十三号)が発表された。樋口本に関する言及もあり、御教示を得た。本稿に補訂すべき点もあるが、別の機会に譲ることとし、今はこのままとしておく。

此抄者清輔朝臣不攝也　近来院御字

仁平年中抄歟怪可勘之

珍書庫

枕秋一字抄　上

東　小　上　中　下

間　外　前先　半　後

遠　遠近　遠遥　長　短　久

隔　年々　時々　晩　朝　暮夕

夜　明　霧　未晴　出　閑

不雨　涼　寒　温暖　冷　早遠

遥　遥遠　朝　初　盛　終

晝　遥　送　衛　佛　殘

不殘　延　增　添　副　夾

面倒　遠　礙障　隔　籠　載

2丁表

1丁裏

寛文九年十月十七

110丁裏

此抄者清輔朝臣所撰也　近衛院御宇仁平年中抄歟、猶可勘也」（一ウ）

和歌一字抄　上

東　北　上　中　下　邊頭

間　外　前先　半　後　近

遠　遠近　遥遐　長　短　久

舊古懐旧　年〻　時〻　暁　朝　暮晩夕

夜暗　明　霽晴　未晴　幽　閑静

不閑　凉冷納涼　寒　温照　漏　早速

遅　遅速　期　初始（ママ）　盛　終

盡　逐　送　漸　稀希　残

不残　延　増　添　副　夾

回繞（ママ）　連　礙障　隔　籠　蔵隠」（二オ）

掩埋　滿　滋繁　重　帶　映

寫　孚（ママ）　開　落　未落鮮　散

靡　随　飛　乱　薫　芳馥

匂　緑　紅　白薄　浅　深

底　流　不流　洲　岸　林

叢　村　路徑　處〻　庭　砌

隣　山家　野亭　田家」（二ウ）

東　春来従東後拾　師賢朝臣

一　東路はなこその関もある物をいかてか春の越てきつらん

同題　大江匡房卿

二　都にはけふ立春を過てこし衣のせきはいくかなるらん

北　風来従北　行宗卿

三　かそふれは神無月にも成にけりこしちの風そけしきことなる

上　水上落花　能因

四　桜ちる水の面にはせきとむる花のしからみかくへかりけり

同題　源俊頼朝臣

五　花のちる下行水の底しれは影には波の風となりけり

水上郭公良暹打聞　石清水清成法橋」（三才）

六　夏はまつ舟路にいてん郭公おもひのほかにはつねきゝけり

海上蛍　定家

七　みつしほに入ぬる礒を行蛍をのかおもひはかくれさりけり

水上落葉金　藤原伊宗藤ノ右中弁伊家ィ

八　柞ちるいはまをかつく鴨鳥はをのか青羽も紅葉しにけり

水上秋月拾　文時卿藤ノ式部大輔久時ィ

九　みなそこに月のしつむをみさりをは我独とや思ひはてまし

水上冬月　源信宗朝臣

一〇 冬のよのあしまにやとる月影はむすはぬ水の氷るとそみる

池上花　　顕季卿

一一 きしちかく匂ふ桜の花みれはしつえや池のかさしなるらん」（三ウ）

池上月　　良暹法師

一二 月影のかたふくまゝに池水の西へなかるとおもひけるかな

池上落葉　　經信卿

一三 玉藻かる舟出はしはし心せよ池の紅葉はにしきをるなり

海上夜月　　大江嘉言

一四 夜ふくともいさこき出ん月影のいらむ所を泊とをして

橋上藤花　　顕季卿

一五 うすくこくしつかに匂へしつ枝まてときはの橋にかゝる藤波

橋上初雪金　　前斉院尾張

一六 白波の立わかるかとみゆるかなはまなの橋にふれる白雪

松上雪　　藤原國行」（四オ）

一七 淡雪も松のうへにしふりぬれは久しく消ぬ物にそ有ける

中　雨中鶯金　　俊頼朝臣前木工頭ィ

一八 春雨はふりしむれとも鶯の聲はしほれぬ物にそ有ける

雨中梅　　為義朝臣

一九 はる雨のいとかきたれて紅の玉をつらぬる梅の花哉

雨中野草　無名

二〇　春雨のふりそめしより野へみれはふる緑(ママ)にも成にけるかな

雨中花　安全法師(法イ)

二一　そほつとも花の下にしやとはせむ匂ふしつくに衣染へく

雨中落花打聞　藤長家卿大納言イ

二二　春雨にちる花みれはかきくらしみそれし空の心ちこそすれ」(四ウ)

雨中藤花金　源顕仲卿神祇伯イ

二三　ぬるゝさへうれしかりけり春雨に色ます藤のしつくと思へは

雨中瞿麦　後頼朝臣

二四　いにしへはちりをたにこそ払(いとひ)けれ雨にしほれぬなてしこの花

雨中郭公　經信卿

二五　子規雲路にまよふ聲す也をやみたにせよ五月雨の空

雨中早苗　関白前大政大臣忠通

二六　早苗とるけふしも雨のふることは世のうるふへきしるし成けり

雨中女良(ママ)　俊頼朝臣

二七　心からたれにたはれてをみなへし雨にうたれて袖しほるらん

雨中野花　顕季卿」(五オ)

二八　雨ふれは思ひこそやれ露にたにおもけにみえしまのゝ村萩

雨中落葉　長國朝臣

二九 風にちる音は(一)時雨てきゝわかすぬれぬ限そこのは成けり

風中虫声　無名

三〇 宮城の、露こそ風にこほるらめ虫の音さへも乱成かな

雪中子曰　俊頼朝臣

三一 ねのひしてよはひをのへに雪ふれは二葉の松も花咲にけり

雪中松樹低（低字依無其篇人中字）　定家

三二 花とみて雪も日数もつもりゐて松の梢は春の青柳

雪中松樹低　同

三三 風のまのもとあらの萩の露なからいくよか春を松の白ゆき」（五ウ）

雪中若菜　能宣朝臣

三四 春日野のわかなも今はおふらめと人よりさきに雪そふりつむ

雪中鷹狩（金）　源道済（桑前守）

三五 ぬれ〳〵も猶かりゆかんはし鷹のうわ毛の雪をうちはらひつゝ

雪中旅人　經信卿

三六 み山ちをけさや出つる旅人の笠白妙に雪はふりつゝ

竹中鶯（打聞仏生）　無名（聖梵禅師　東大寺）

三七 花さかぬ竹にのみすむ鶯はみしかき夜をや春としるらん

舟中郭公　俊頼朝臣

三八 おひ風にもとるもたゆし時鳥いさ高妙の松の梢に

船中霰　　西行」（六オ）

三九　せとわたるたなゝし小舟心せよ霰みたりししまきよこきる

舟中月　　大江匡房卿中納言

四〇　つねよりも月の光のくまなき（さやけきはイ）は天の河せに舟やきぬらん

山中時雨鳥　　俊頼朝臣

四一　時鳥をのかね山の椎柴にうつり（かへりイ）こそはや音つれもせぬ

旅中春暮　　同

四二　別ゆく三月の空もし（にイ）たはれてしらぬ野へにもまとふけふ哉

旅中聞鴈後拾　　白河院御製

四三　さしてゆく道も忘てかり金のきこゆる方に心をそやる

下　花下旅宿　　俊頼朝臣

四四　かさし（やイ）たの若のたもとに散そむる花を衣にかさしてそぬる」（六ウ）

松下風聲哥合　　持方（時イ）

四五　松かえに秋吹風の音きけはくもらぬ空に袖そぬれける

林下時雨　　行宗卿

四六　立よれと時雨たまらぬ柞原もる山ともやいふへかるらん

邊頭（ヘヽヲ）　水邊残雪　　藤原經衡大和守

四七　いかにして残れる春の雪ならん氷とけにし池のみきはに

水邊梅花後撰　　平經章朝臣東宮亮

四八 すゑむすふ人の手さへや匂ふらん梅の下行水のなかれは

水邊桜花　師賢朝臣

四九 池水のみきはならすは桜花影をも波におられましやは

水邊款冬金　関白前太政大臣」（七オ）

五〇 限有てちるたにおしき山吹をいたくな折そ井手の河波

水邊蛍　嘉言

五一 水のおもにわたる蛍の影みれはをのか思ひもかくれさりけり

水邊夏月打聞　安倍佐影頼イ

五二 かつきするあまたにしらぬわたつみの庭さへてらす夏のよの月

水邊夏草　俊頼朝臣

五三 夕立にしほるゝさはの鏡草水の影もや葉にやとるらん

水邊草花　輔仁三宮親王

五四 河舟のさほのしつくのおちそひていはねの薄いとゝ露けし

水邊秋花後　能宣朝臣

五五 水の色に花の匂をけふそへて千年の秋のためしとそみる」（七ウ）

水邊寒草　西行

五六 霜にあひて色あらたまる芦のほのさひしくみゆるなには江の浦

水邊紅葉金　經信卿

五七 大井河いはなみたかしいかたしよ峯の紅葉にあからめなせそ

水邊蘆葉　顕季卿

六六 見渡はあし葉をしなみ茂りあひて道絶(たつくイ)ぬよし堀江こく舟

水邊旅宿　師賢朝臣

六七 磯なるゝ心そ絶ぬ旅ねするあしのまろやにかへる白波

水邊藤花(金)　經信卿

六八 池にひつ松のはひ枝に紫の波をりかくる藤咲にけり

水辺松　為時朝臣」（八オ）

六九 池水にうかへる千世のかけをみて末の松かけ思ひこそやれ

海邊柳　花園左大臣(道其(ママ)輔仁)　仁和寺左府(有仁イ)

七〇 塩みてはあまの釣かとみゆるかなきしへにたてる青柳の糸

海邊霞　俊頼朝臣

七一 春霞たなひく浦はみつしほに磯こす波の音のみそする

海邊月　顕仲卿

七二 かもめゐるふちえの浦のおきつすに夜舟いさよふ月のさやけさ

岸邊牡丹　同

七三 あきそきや岸邊にさけるふかみ草ふかくそ水に影はしつめる

岸邊秋花　源順(能登守)

七四 色ふかく岸のほとりにさける花あたの波にはおられさりける(リイ)」（八ウ）

野邊枯草　顕仲卿

しのきあへす分こし野へも冬くれはもすそにかゝる草のはもなし

山邊梅花（カイ）　源仲正（兵庫頭）

よのつねの妻木はこらし春山の梅の匂を薫物にせん

嶋辺鷺　行宗朝臣

むれゐたるとしまか崎の白鷺を立なは雪のきゆるとやみん

岸頭白菊　定誓律師

我宿の岸のひたいの白菊はまゆのあいたの玉とこそみれ

間霧間野花　藤原行家朝臣（讃岐守）

秋の野の霧のたえまの花薄ほのめく色をみつるけふかな

雨間花　関白京極前太政大臣（賢実）」（九オ）

吹風にちるたにおしき桜花又春雨にしほるへしやは

松間桜（金）　花園左大臣（仁和寺左府）

春ことに松のみとりにうつもれて風にしられぬ花桜哉

同座（金）　内大臣実能公（公実男）

此春はのとかに匂へ桜はな枝さしかはす松のしるしに

松間紅葉　藤顕輔卿（左京大夫）

住吉の松のたえまの紅葉にやつもりのあまの秋（はイ）をしるらん

同題　師光（袋）

あたりなる紅葉吹おろす松風はをのかときはの程をしれとや

外　雲外郭公　行盛朝臣

七七　待らんとしらぬかほにて時鳥雲ゐなからも過にける哉」（九ウ）

野外草花ノ　延暦寺隆源法師号若狭

七八　まつすけやそろひしけれる野沢にも菫つむとて一夜ねぬへし

野外女郎花　顕季卿

七九　女郎花うしろめたくもみゆる哉あたの大野にたてると思へは

野外尋虫　師時卿

八〇　草枕旅ねやせまし秋の、に人まつ虫の聲をたつねて

前　月前落花　經信卿

八一　くまもなき月はかりとやなかめまし散くる花のかけなかりせは

月前秋花　藤原輔昭

八二　うしろめた月の前なる女郎花露に心やをきかはすらん

月前落花　白河院御製」（一〇オ）

八三　紅葉、の雨とふるなる木間よりあやしく月の影そもりくる

月前白菊　大江公賢朝臣兵部権大輔

八四　秋のよの月にまきる、白菊はうつろはせてそおるへかりける

月前述懐後　藤原実綱朝臣式部大輔

八五　いつとてもかはらぬ秋の月みれとた、いにしへの空そ恋しき

月前松風裏(2)　定家

八六 夕より雲はまよはぬ月影に松をそはらふ峯の木枯

月前郭公　大宮式部

八七 時鳥雲のたえまにもる月の影ほのかにそ鳴わたるなる

月前虫聲　行宗卿

八八 月清み野もせにすたく鈴虫のふりせぬ聲のめつらしき哉（一〇ウ）

先　柳先花緑　公実卿三条大納言

八九 浅緑まつとて人のくるものは花にさきたつ青柳のいと

秋花先秋　関白

九〇 いつるひをいかにかそへて夏草に咲ましるらん朝かほの花

半　山花半綻　隆源

九一 さきさかすむらこにみゆる山桜あすをみてやは立かへるへき

紅葉半落打聞　俊長少将中ィ

九二 いかなれはおなし梢の紅葉、をちらし散さす風の吹らん

池水半氷裏　定家

九三 池のおもは氷やはてんとちそふる夜比の数をまたしかさねは

同題　後京極摂政裏」（一一オ）

九四 池水をいか、嵐の吹分て氷れるほとのこほらさるらん

後　雨後残花　延暦寺慶範法し号横川内供

九五 散はつる花をみましやあま雲のはる、けふたに尋さりせは

雨後野草金　　俊頼朝臣

九六　此里も夕立しけりあさちふに露のむすはぬ草のはもなし

雨後落葉詞　　同

九七　なこりなく時雨の空は晴ぬれと又ふる物は木葉也けり

雨後月明　　良暹

九八　今はとてぬへかりけりや時雨つる空ともみえすすめる月哉

雨後山水　　藤基俊前左兵衛佐

九九　吉野山そらや村雨ふりぬらし麓の瀧津音とよむ也」（二ウ）

夢後時鳥　　白川院周防内侍

一〇〇　思ひねの夢路に心かよへはやおきふす床にきく時鳥

同題　　俊忠卿

一〇一　おほつかなねさめの空に時鳥夢はかりこそ鳴渡るなれ

老後見月良　　津守國基

一〇二　あかすして老はてにける我身かなこんよのやみをてらせ月かけ

雨後月袁　　定家

一〇三　かきくもり侘つゝねにし夜比たになかめし空に月そ晴行

近　山近聞時鳥　　藤原盛房肥後守

一〇四　時鳥いかてきかまし音羽山すその、里にやとらさりせは

山近聞鹿聲　　橘為茂朝臣但馬守」（三オ）

一〇五 山さとはさひしけれとも鹿の音をゐなからき、そ人そまされる

叢近聞虫聲　源縁

一〇六 草村の遠からませは虫の音をね覚の□にいかてきかまし

梅告春近　顕季卿

一〇七 雪のうちにつほみにけりな梅花春明かたに成やしぬらん

林近聞鶯聲　無名

一〇八 くれ竹のしけき宿には鶯の聲をひまなくきくそうれしき

近對紅葉　藤行宗卿伊賀守

一〇九 色ふかきよその梢にあかなくにたをるはかりにきてもみる哉

遠　遠山桜後　藤原清家

一一〇 よしの山やへたつ嶺の白雲にかさねてみゆる花桜かな」（三ウ）

遠山花　俊頼朝臣

一一一 神山にまそをのぬさを引かけてさらすや花の盛成らん

遠山紅葉　橘為義朝臣

一一二 都たにさかりとみゆる紅葉、のふかき山へを思ひこそやれ

遠山雪上料抄　頼氏式部大輔

一一三 よそにのみ吉野の山の雪とみてわか身のうへとしらすも有哉

梅香遠薫上料　橘則長

一一四 香をとめて人のくるよや梅花はるかに匂ふ物としりぬる

遠山暁霧 裏

二五 ほのかなる鐘のひゝきに霧こめてそなたの山は明ともみす

梅花遠薫　後頼朝臣」（三オ）

二六 心あらはとはましものを梅花たか里よりか匂ひ来ぬらん

遠尋花 後　小弁 祐子内親王女房

二七 山桜心のまゝにたつねきてかへさそ道のほとはしらるゝ

削 遠尋山花

遠尋山花（ママ）　新院御製――。イ

尋つる花のあたりになりにけり匂ふにしるし春の山風

遠尋山花　関白前太政大臣

二八 帰へきほとをおもはぬ道ならはのとかに峯の花はみてまし

遠見卯花　後頼朝臣

二九 卯花のよそめ成けり遠近にいつかは波のいせきこえける

遠聞時鳥　顕季卿

三〇 山ひこのこたへさりせは時鳥ほかに鳴音をいかてきかまし

遠思秋花 秋イ　匡房卿

三一 宮城野、木の下露のをもけれは小萩か末やちしほ成らん」（三ウ）

擣衣聲遠　同

三二 衣うつ遠の里人きりふかみあるかなきかの聲きこゆ也

月前遠情　後頼朝臣

二二五 出雲には晴ぬ八雲にとちられて今夜や月のおほろ成らん

雪中遠情　同

二二六 すかたる（ママ）ゝまやのあれよりもる雪やみ（月）ししほこしのひにも成らん

遠山桜　匡房卿

二二七 高砂の尾上の桜咲にけり外山の霞たゝすもあらなん

遠花誰家　定家（ママ）

二二八 よそなからおしき桜の匂ひかな誰我宿の花とみるらん

遠岸蘆花　信綱朝臣」（一四オ）

二二九 見渡せはをちの河きし白妙に浪たちまよふあしのほすゑに

遠尋山花　新院御製

二三〇 尋つる花のあたりに成にけり匂ふにしるし春の山風

遠近　遠近卯花　太政大臣実行

二三一 卯花は遠のかき根も咲にけり我宿をしも折なつくしそ

遠近落葉　定家

二三二 苔むしろ緑もかふる唐錦一葉のこさぬ遠の木からし

遥遇年（3）遥見花金　匡房卿

二三三 初瀬山雲ゐに花のさきぬれはあまの河浪立かとそみる

遙見山花　同

一三三 高砂の尾上桜咲にけり外山の霞たゝすもあらなん」（一四ウ）

遙聞郭公　道済

一三四 はるかなるたゝ一聲に時鳥人の心をあくからしつる

同題　藤長能伊賀守

一三五 誰里のありすなるらん時鳥あるかなきかに鳴わたる也

同　藤輔尹朝臣木工頭

一三六 子規待しはかりに盛にけり今夜もよそに一聲そなく

同　平祐挙越中守

一三七 ほのかなるたゝ一聲は時鳥ね覚くやしき心ちこそすれ

同　輔親卿

一三八 うとくこそ聲は成ぬれ時鳥まちかくたにもあかぬ心を

同　嘉言」（一五オ）

一三九 いつかたとき、たにわかす時鳥たゝ一聲のこゝろまとひに

以上御堂三十講御哥合

遙思月　顕季卿

一三九 心あらは今夜の月を唐国の人もなかめてあかささらめや

遙見行客　三條大納言

一四〇 あまさかるひなのなかちし遠けれは忍ふ衣誰にしられす

遙望山花　仁和寺左府

[四一] 朝ことにをなし麓にゐる雲のたかねとみゆる山桜哉

花契遐年金　顕輔卿

[四二] 万代にみるへき花の色なれと今日の匂ひはいつかわすれん

松契遐年　顕季卿」（一五ウ）

[四三] 今年より枝さしそふる松の木の花のおり〳〵君そみるへき

長　池水長澄後　藤原範永朝臣

[四四] 今年たに鏡とみゆる池水の千世へてすまん影そゆかしき

下冬秋夜長　家經朝臣

[四五] ね覚して後そ久しき秋の夜は老ぬる人そ先しられける

雪中夜長　匡房

[四六] なかき夜にふりつむ雪は白雪のかゝるはかりの山と成らん

上秋夜長　後頼朝臣

[四七] 秋の夜の鳥の初音はつれもなき人待しよの心ちこそすれ

短　野草緑短　新院御製

[四八] よそにては駒すむ野邊とみえつるや今もえ出る小草成らん」（一六オ）

夏夜短　俊頼朝臣

[四九] 夏の夜は俄にてらす稲妻の光のまにそ鳴ぬへらなる

久　梅花久薫　匡房卿

[五〇] 九重に八重咲梅のことしより万代へても匂ふはかりそ

①　同　　藤顕仲前兵衛佐

梅かえにかせをいとへる春なれはのとかに花もにほふなりけり

庭花久薫　　藤忠教卿大納言

一五五 ほりうへし若木の梅に咲花は年もかきらす匂ふ成けり

皇嘉門院立后後始會

藤花年久　　源師頼卿大納言

一五六 春日山北の藤波さきしよりさかゆへしとはおもひしりにき

岸菊久匂　　善滋為政文章博士

一五七 緑なる松の千年をあらそふはみきはにさける白菊の花」（一六ウ）

②　岸松久緑　　大相國

池水の岸の岩ねにねをとめておいそふ松のいく世へぬらん

鶴為久友　　仁和寺左府

一五八 此里になれて久敷すむ鶴は君かちよをやともに待らん

舊古懐旧舊年梅花　　明快僧都天台座主

一五九 山里のかきねの梅は咲にけりかはかりこそは春も匂はめ

月照古橋金　　三宮

一五六 とたえして人もかよはぬたな橋は月はかりこそすみ渡りけれ

對月恋古人　玄々集向月思友トアリ　　中原長国

一五七 月にこそむかしの事はおほえけれ我をわする、人にみせはや

對月懐旧後　　源師光前之(ママ)蔵人之時詠之

[258] 常よりもさやけきよはの月をみてあはれ恋しき雲の上哉

年〻　年〻見花　　太政大臣実行」（一七オ）

[259] おりてみる年のかさなる花なれは匂はん春の限なき哉

時〻　時〻會恋金　　顕国朝臣

[260] わか恋はしつのしけいとすちよはみ絶まはおほくくるはすくなし

同　　顕仲入道

[261] めつらしといはるゝほとに逢(なる)ことはいくよをよそにへたてきぬらん

同　　殿下

[262] あひみては久しく成ぬとおもへともぬるよの数はすくなかりけり

（以下、次号に続く）

（1）「音は」――「そ」らしき文字を書き直す。

（2）「恋」のように読める。

（3）「付」に「え」のような文字。